

■もう1冊の若手に読んでもらいたい本

柴山充弘のおすすめ
東京大学物性研究所 教授



分野：文学・科学
書籍名：寺田寅彦随筆集
著者名：寺田寅彦
出版社：岩波文庫
出版年：1963年
価格：756円

1991年のマサチューセッツ工科大学 (MIT) 留学時、渡米直前に生協で購入し、持参した寺田寅彦随筆集を通勤のバスの中で愛読した。文庫本で全5巻、軽量なうえ内容が充実したこの随筆集は、英語の生活に疲れたときの息抜きとして格好の読み物であった。また、それを海外で読むというはなかなか味のあるものであった。大正から昭和初期にかけての随筆中にちりばめられた時代を超越した真理や寅彦の科学者としての提言の数々に思わず朱を入れつつ、何度も読み返した。また文学者としての寅彦からは、日本文学、とくに俳句の深遠さを学び、日本にいるとき以上に日本の文化や風土を懐かしく感じたのを思い出す。東京大学物理学教授としての寺田寅彦は物理学の何たるかを、あるときは身近な例をもって示し、またあるときはギリシャ時代の先哲の言葉を借りてわれわれに語りかけてくれている。

幾多の含蓄のある言葉の中に、「量的と

質的と統計的と」の中の一節、「第一義たる質的発見は一度、しかしてただ一度選ばれた人によってのみなされる。質的に間違っただ仮定の上に量的には正しい考究をいくら積み上げても科学の進歩には反古紙しか貢献しないが、質的に新しいものの把握は量的に誤っていても科学の歩みに一大飛躍を与えるものである。ダイヤモンドを掘り出せば加工は後から出来るが、ガラスは磨いても宝石にはならないのである。」がある。量的情報が氾濫する今日、われわれは彼のこの言葉を当時よりも厳粛に受け止める必要がある。

